

アニコのストライキ

―青手帳(日雇港灣労働者)の斗い―

沖野 奈加志

港灣で働く労働者のことを沖仲仕(本船)・沿岸仲仕

(卓頭(倉庫))と呼んだのは、もう大分昔のこと。今は

港灣労働法が昭和四一年に施行されて登録港灣労働者手

帳(青手帳)をもち、職安を通じて仕事に行くので、登

録日雇港灣労働者という、いかつい呼び方をする。

カチカチ頭の役人のつくった法律だから、何もかもむ

つかしい。仕事に行くことを就労、アブレを不就労、ア

ブレ手当を雇用調整手当と言い、賃金には一級から十級

までの等級があり、働いた日数によってアブレ手当も一

級から十級までである。

それから常用と日雇、船内と沿岸にそれぞれ定数とい

う人数が決められていて、いまの港灣では、日雇も自由

にできない。

そのため首のない日雇の首切をやることに法律で決

められている。

そんなキュークツなところで、何で日雇してるんやと

思う人があるだろう。

そこで労働者の側の言分があつて、港労法はそうなっ

ているが、そうはさせないぞという抵抗が起きて、どっ

こい政府や業者の思う通りにならんぞ、という闘いがは

じまるのである。

一、初日に騒動が起きた

四一年の七月一日に、大阪、神戸、門司、名古屋、横

浜、東京の六大港で港労法が施行された。

各府県の労働部や職安が、いいことづくめのドラを配

って青手帳をもつよう宣伝した。

それで青手帳をもって、職安へ行ったら立ちん坊して

いたときよりマンボ(賃金)が下っていたので、皆んな

怒った。少数の者はそれでも仕事に行ったが、数百人は

職安になだれ込んで抗議した。業者の代表の言うには、

職安を通じて来るので誰が来るかわからんから、低い賃

金でしか出せない、ということらしい。

業者の言分はそうであっても、働く者にとっては法律

ができたため賃金が下ったというので職安の責任を追及

した。

それでとうとう職安が、仕事に行かなかつた者に不就

労認定をした。アブレ手当を出すということになった。

初日には神戸の井天浜でも同じ様な騒ぎが起きた。

それからつぎは雨降りに騒ぎが起きた。雨が降ってい

て、何時間か半日か待機して雨が上らんとときにバレ(手

配解け)るとバレ賃が安いので頭にきていた。

雨降りは労働者の責任ではないのだ。雨が上つたら仕

事をするのだ。そのため待機するのに、バレ賃がアブレ

手当より安いときがある。それに雨でもやれる仕事があ

るが、雨濡れ作業でカゼひいても、カゼひきは労災扱に

はならんので、雨降りは輪番紹介ではなく、自由紹介に

せよという騒ぎが起き、ついにこれも労働者の言分を職

安が認めた。

また労災事故にやられて松葉杖をついていた仲間が、

業者が休業手当を立替えてくれないので生活に困り育カ

ンしていたということもあった。

そういう状態であつたので全港灣労働組合では、全国

の常用組合員がカンバを集めて、オルグがピラを配り、

マイクで組合結成を呼びかけた。

二、アニコの労働組合

それで六大港につきつぎつぎと日雇の組合がつくられてい

った。大阪では四一年七月一八日に全港灣大阪港分会が

旗上げた。

はじめの二年程は沿岸労働者が主として組合に加入し、

職場毎に、毎日どこかで現場闘争をやっていた。沿岸勞

働者は以前からシマ(グループ)を組んでいてまとまる

のと世帯持が多く、持、手、肩など技能者がいるの

で、この仕事は幾らぐらい、どの仕事は何人でやるもの

だという、賃金の相場づくりと作業条件をつくっていつ

た。

朝、職安の紹介で現場に行く、賃金が安い、条件が悪

いなどすると、現場に座り込んで交渉する、決まらなかつたら皆んな帰ってしまう。それでは業者が困るから要求が通る。

これをドウトリと言った。沿岸労働者の賃金はこれです少しずつ上ってきたが、船内労働者は単身者が多く、いやなときは帰ってくるという自分の損になる抵抗をしてきた。

それで船内の賃金はハリヤのオバハン（破れた麻袋を針でつくり仕事）より安かった。

それでも船内労働者のなかにも少しずつ何とかせなあかん、という者が小グループをつくっていた。

イ、雨の日のナイトアブレ手当

港労法から一年余り後の四二年七月五日に夜勤紹介を待っていた労働者の目の前で求人が殆んど取消しになった。雨が降るといふ理由らしいが、取消理由を説明せよと三十人程が職安にせよと言ったが、説明する必要はないと労働者を押出そうとしたので、もみ合いとなり、職安の鉄門に体をはさまれた労働者を職員が内から門を押してはなさない。

やがて雨が降り出し約三時間ビシヨぬれになった労働

者は、職安の警察を呼ぶぞというおどかしに後退したが翌日の新聞に「港内労働者騒ぐ」「あれでは労働者が怒るのはムリもない」という記事がでた。

この闘いで労働者の知ったことは、港内では元請（三菱、三井、住友、日通その他）が下請に労働手配を申込むと、雨や荒天で荷役ができなくても七割の待機料金が払われることになっており、下請の荷役会社は求人を取消すと丸もうけするということが分った。

もっと後になって分ったことであるが、実際には、この待機料がまともに払われておらず、下請業者はダンピングして元請のゴキゲンをとり、下請どおしで仕事のとりに合いをするので、そのシワよせが労働者にかかってくる、それで最近では労働組合がダンピング防止の要求を出して闘うようになっていた。

雨の中でアブレた苦しさの中から、闘いを通じて、ア

ンコが港の仕組みを覚えていったのである。

この雨の中の闘いは三十人余りであったが四二年七月二五日に闘いの輪は広がった。

丸二運輸の求人だ肥料積荷作業一〇〇人がでていた。若しこの求人がなければ、何十人かがアブレ手当がもらえるのだ。誰かが叫んだ。「あれはオトリ求人や、ほんまは三十人位のハズヤ」誰もがそう思っていたのだ。以

前からとういうことがときどきあったのだ。

アブレ手当をとらさんための水まし求人だと皆んなが怒りだし、それなら皆んなで行こうと、一〇〇人の求人

に皆んなのった。

寄場へ行くと思どおりだった。ヘルメットはないポイントは一ぱいで乗れない、業者の誰かが「いやなら帰れ」と言ったのを機会に八二人が職安にもどった。

職安に対して、「行ったら帰れというような求人は何故紹介したのや」と責任追及した。職安の役人はウロがきて、どうもようしない。本社へ行けと丸二に押しかけたら、社員は皆んな逃げておらない、社長は病気がた出てこない。八二人は、いつの間にか他のアブレの人

も応援にきて、三百人ほどになっていた。

港警察のポリが来たが、不当介入だと皆んなで追及した。

この日組合は業者代表と夏期手当（そうめん代）の交渉をしており、離航していた。その最中にこういう現場闘争が起きたので、業界はあわてた。

結局午後になって業界代表があっせんに入り、今後こういうことはやらない、今日の賃金は全額払うといふことになり、専務が会社の表でアッコに頭を下げてあやまった。

ロ、ハッチ蓋の闘い

九月に住友倉庫南岸の英国船ラジア号でハッチ蓋作業中に四名が墜落死傷事故が起きた。うち二名が日曜で、死んだ一之瀬さんは間口に就労中であつた。一之瀬さんは東田町に住んでいて妻と子供二人が残された。

この事故の数日後にNHK近畿の話題の中で、「港では何事故が多いのですか」という質問に、出席していた業者の一人は「日曜は根性がないからケガする」またもう一人は「お日さん西でやっているから」などと船の構造の悪さ、作業の荒さ、人づかいの悪いことを無視した発言をした。

たった一人梶本組の社長だけが「使用者も安全対策について考えねばならん」と言っただけである。この梶本組は鋼材専門の荷役で一番危険なところであつたが、業者のこういう態度に労働者の怒りは高まった。

船のハッチ蓋は倉庫に例えると、倉庫の戸であつて、戸びらの開閉は倉庫の持主のやる仕事である。仲仕は荷物の出し入れをするのが仕事である。そのため本船のハッチ蓋の開閉は本船の船員の仕事である。それを仲仕がやるについては荷役料金の他にハッチ蓋料金がでていた。

「命がけの仕事を取らなくてはやれん」と労働者が言うのと、「賃金の中に含まれている」と業者は言う。「鉄道の巻上げ式でも木蓋で人間がやっても賃金は同じやないか、どっちに手当がついて、どっちに出ないのかハッキリしてくれ」というと業者は答が出ない。ハッチ蓋をメクラん闘争は、それから約一年半ほどつづくが、現場ではメクラれメクラんで暴力、脅迫が絶えずある。労働者はひるまず闘い、組合は暴力事件が起きると抗議し、脱罪させ、ピラで結末を知らせて現場の闘いを力づけた。

八、職安斗争

こうした闘いの中で船内労働者のなかから組織的に団結して闘おうという気運が起り船内闘争委員会が四三年秋につくられた。闘争委員会に陸からの圧力が加わり何人かは離脱していくなかで、新手が加わり、四四年の春闘を計画したが、準備不足で四四年の賃上げは業者に一方的に押切られた。業者は言った、「仕事とシラミはワキしだい」賃金は業者の決めるものだ、というのだ。負けた労働者は、新たな抵抗をはじめた。

七月一日に富栄の求人四五名のうち七人がつけたところで取消になった。職安は業者の言いなりだと労働者は怒った。

翌一二日に常用にボーナスが出た。一四日の日曜は常用の多くが休んで、職安求人はずっと出た。日曜のそうめん代は、まだいくら出るか決っていない。一日の求人取消問題が解決していないので、船内労働者六百五十人程が紹介を拒否して座り込んだ。仕事についたのは、二、三十人で、裏切り者の怒声に引返してくる者もあつた。

「アブレ手当さえ出せばすむ」という職安の無能さ、業者の言分をきくのなら、労働者の言分もきけ」と座り込は続いた。

一六日に出た職安求人札には、それまではどこの船でどんな仕事をやらされるか分からなかったのが、船名、場所、貨物名、作業内容、人員、賃金がはっきりと掲示された。四年来の労働者の要求が、はじめて六百人の座り込で実現したのだ。皆んなの意気は高まった。

職安所長はじめ課長、指導官が、みんなの前に出て頭を下げ、「あやまり方が足らん」というバ声のなかで、所長があやまった。

現場闘争は更に発展する。職安、に書いてなかった

貨物があると現場で拒否する。ずるい業者は人のいやがる貨種を書かないで現場でごまかしてやらせるか、おどかしてやらせたのである。黒鉛、デンブ、塩漬生皮など常用もやらないケタ落ちは拒否し、やる気になれる割増金が出るならやる。

業者が賃上げせぬなら、現場闘争でとる。組合はそれをピラで皆んなに知らせて、闘いのチエをつけていった。さきに書いたハッチ蓋闘争とこの条件闘争を併行して毎日港のどこかで現場闘争の起らん口はなかった。雨降りのパレ賃も全額よこせと寄場で本社で座り込み、翌日の職安寄場は昨日はどこの賃種通いでいくら手当を出させた、どこのパレ賃は全額とった、と前日の成果は翌朝、いやその日のうちに釜の酒屋で語り合って拡がった。まさに職安寄場は闘いの原点となったのである。

三、万博と釜と港

四四年頃の釜は万博と関連工事の仕事と人であふれていた。ドヤは高層化していった。

全港湾建設支部西成分会が五月に結成された。釜の労働者は、昨日は土方、今日は港湾と現場は流動する。港湾で荷揚げした鉄筋、セメント、材木、建築資材を建設

労働者が使う。港湾と建設は一体なんだ。港湾の賃金や労働条件が悪ければ、建設業者もそれにならう、建設が悪ければ港湾がそれにならう。全港湾は西成分会の結成に力を入れた。

分会の結成大会や、その後のセンターとの団交には、大阪港支部の日雇が支援して、手配師やヤクザの妨害をはねのけた。

センターとの団交のとき港湾の手配師が港湾では全額か八割ぐらいとっているのが、釜から来た労働者には半額以下ということが港湾の組合によって暴露された。

あいりんセンターのことをピンハネセンターと言うようになったのはじまりである。

四五年は七〇年春闘の年である。港湾の組合では、前年の業者の一方的な押え込みに対して三月ははじめから闘争を強化して、毎朝時間内集会をやり労働時間を短かくしていった。

三月下旬よりは本船で座り込み、日当三千円よこせをやり、賃上げ相場をつくっていった。

三月三十一日に大港その他七隻の船で座り込み、午後九時頃まで闘ったが、四月一日より業者は一名の求人も出さなくなった。

「アンコ殺すにや刃物はいらぬ、雨の三日も降ればよい」というが、どっこいそうはいかなんだ。一人も求人がないのだからアブレ手当がとれる。それ以後二十数日、業者が団交に応じるから仕事をしてくれと泣きを入れてくるまで、皆んなアブレ手当でガンバった。

賃金が上れば四月一日にさかのぼって差額を支払うという状態で、貯金のきらいなアンコが毎日貯金しているという状態で働きました。

なぜ業者が折れてきたか、常用だけでは仕事にならないのである。普通なら一週間でやれる綿実の荷揚げが二〇日たってもまだ船が保留されている有様であった。

本船の停船料は経費も含めて一雙一日百万円から二百万円かかる。荷役会社どころか、船会社、荷主が困り、相場が変わり政治問題にもなるのである。

政治と関係ないと思っていたアンコが実は一番深い関係があるということが分ってきて自分たちの値うちが分ってきた。

四月十日と一七日には通船乗場で、千八百人の港灣日雇が座り込み、二千人の常用労働者がそのまわりにピケを張り、五七隻の外国船を主とした本船の荷役は全部停止した。

四一年に港労法（青手帳）ができて五年目についてス

トライキをやったのである。
 // 右を見ろ、左を見ろ、前も後も、みんな顔見知りばかりやないか、港は一つ心は一つ、なんとすばらしい港の夜明けだ・・・ // 夜明けの浜にスピーカーは一ぱいのポリニウムを上げた。
 // 盃組の支配からキツパリ縁を切るときだ // ピラに書かれていた。
 // 港に赤旗は一本も立てさせない // という親分支配の港は赤旗と鉢巻でうずまり、歌声がなりひびいた。

読者の声

オ二の号、病氣と付録冊大変だ、たでしよう。

全国津々浦々の、私運集冊には、ホントに有難い内容でした、加筆を祈っています。

☆ ☆

オ二の号は友人から借りて読みました。エングレカフぐせいか、表紙の色のあせに感じが氣になります。元気で頑張ってください。

二、三度事ム所へ行きました。休日でお連れ出来ませんでした。始めて書いたのに味をしのいで、オ二、アッチモ二、オ三、シノダ各四く五十枚を

寄りました。東京に在ると山合や横浜の夷町へ行きます。口何となく歩きにゐる。

丹田一平士

（係）オ二の号に刺してはあまり厚りがありませんでした。丹田さんのいれる表紙のせいかもしりませんが、やはり「病氣」となると思ふし、で、みしな身につまされるのさしうか。今度は、悪徳病院や医者の特集も考えていただきます。ふじい目に会、た例はどの便りがほしうです。

☆ ☆

オ二の号の「不況に著目し」が休日でまたふとつ四天王寺の鐘が鳴るには、五十一年十二日、天六の中更相三階の一号室を以つして、た間境を居

が私の手帳を見て書いた句であり、昨年大目にも、ある人に見せた事があります。

五十一年十二月天王寺三ッピ

オ二の号の「不況に著目し」が休日でまたふとつ四天王寺の鐘が鳴るには、五十一年十二日、天六の中更相三階の一号室を以つして、た間境を居

田本全広（四の才）

（係）田本さんと話がついたこととです。訂正と支におれび申しあげます。オ二の号、二七号、読者文壇の作品です。